

A Short Biography of Dr. Radhabinod Pal, 1886-1967

by Nariaki NAKAZATO

Dr. Radhabinod Pal is an Indian jurist remembered by modern historians for his dissentient judgment at the International Military Tribunal for the Far East convened in Tokyo from 1946 to 1948, in which he held all of the accused not guilty of each and all of the charges brought against them. This paper attempts to bring his biographical data from various sources together and put them in order for the use of Japanese researchers. The main part is a translation of the short biography of Dr. Pal from Bengali into Japanese. It was contained in a booklet handed out by the family of the deceased to the people who attended the funeral service (*sraddha*) observed in Calcutta in 1967. The text is fully annotated by the author with a body of factual information taken from, first, a series of interviews conducted in Calcutta in September 2008 with Mr. Prasanta Kumar Pal, Mr. Bimal Ray and Mr. Samar Dutt; second, archival material preserved in the National Archives of India, the National Library of Australia and the India Office Library; and third, periodicals and books published in India and Japan. It is unfortunate that grossly distorted stories about Dr. Pal's life and opinions have been in circulation in Japan for no less than half a century since the Tokyo trial. It is the author's hope that the present paper will help set them right and lay foundations for assessing Dr. Pal's dissentient judgment in proper historical perspective.

訳注『ラダビノド・パル博士（一八八六～一九六七）略伝』

中里 成章

一 解題

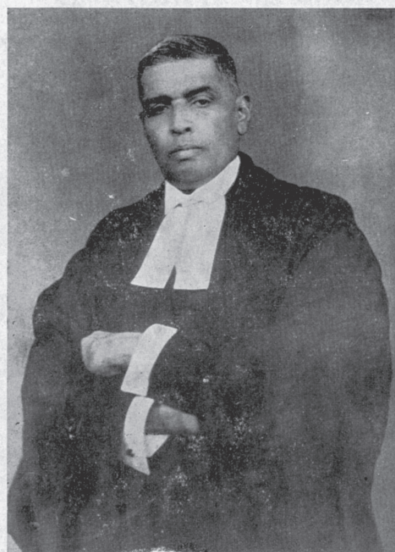
二 『略伝』訳注

三 資料 「弔辞」（元カルカッタ高等裁判所長官 P・B・チヨクロボルティ）
文献リスト

一 解題

ラダビノド・パルは東京裁判（一九四六～四八年）でインド代表判事を務め、A級戦犯の被告全員が無罪であるとする、別個意見書を提出した人として知られる。パル意見書（通称「パル判決書」）は、裁判から六〇年経った今も、東京裁判批判の拠り所として、特に保守派の論客によってしばしば引用され、論争の的となっている。しかし、パルがインド社会の中でどのように生きた人間であったか、表面的な事柄以外ほとんど知られていないのが実情である。

訳注『ラダビノド・パル博士（一八八六～一九六七）略伝』



ডক্টর সাত্ববিনোদ পাল
(১৮৮৬—১৯৬৭)

インド国家の精神的支柱として、尊敬と信望を一身に集めてゐるものと思われるとか「二又一九六六、七五四」、単なる法律家ではなく「思想家であり哲学者であり、同時にマハトマ・ガンジーの意志を継承する全人類愛の使徒」であるとか「下中二〇〇八、二三」、「ガンディーの思想や運動を熱烈に信奉する『ガンディー主義者』」であり「絶対

もちろんこれまでに日本で、パルの経歴と人となり
が紹介されてこなかったわけ
ではない。しかし情報が
限られているばかりでな
く、不可解な誤りがあつた
り、インドの歴史と社会を
十分理解していないことか
らくる誤解があつたりし
て、信頼性に欠けるよう
である。⁽¹⁾その結果、実像とは
かなり異なるパル像が一人
歩きするようになった。た
とえば、パルは独立後の「イ

平和主義者」であるとか「中島二〇〇七、四〇、二九八」する類である。こうしたパルの神話化は、パル意見書を一人の裁判官が書いた反対意見として冷静に分析する妨げになっているように見える。東京裁判におけるパルの言動と意見書をどう評価するにせよ、このような状態が続くのは不幸なことではなからうか。パル意見書の歴史的意義を検討するためには、まずもってパル自身を脱神話化する必要があるであろう。

本稿は、ベンガル語で書かれたパルの『略伝』を和訳し、それに、関係者、特にパルの長男プロシャント・クマル・パル (Mr. Prasanta Kumar Pal) 氏のインタビューや、文献調査から得られた情報を注として加えて、パルに関する伝記的事実を整理し、パルの実像に接近しようとする試みである。

『略伝』は、パルの葬儀（「スラッド」というヒンドゥー教の通過儀礼）のときに参列者に配られた、小冊子（写真参照）に含まれるものである。この小冊子は全一九ページからなり、『略伝』はその冒頭に置かれている。佐藤栄作首相、K・C・バス西ベンガル州議会議長等著名人からの弔電、全インドラジオが放送した弔辞等がこれに続く。『略伝』は、遺族がパルの死を悼み、パルを顕彰するために作ったものである。パルが美化される傾向があるのはやむを得ない。しかし読んでみると、日本で行われてきた紹介よりは、冷静な視点から書かれているように感じられる。いずれにせよ、パルの伝記的事実を系統的に記した資料は、管見の限りでは、この『略伝』しか存在しない。『略伝』はパルを論じる際、基礎的な資料となるであろう。

しかし『略伝』は六ページの短いものである。本稿では次の三つのソースから得られる情報を注として付け加えて、補強することにした。

第一は、プロシャント氏とのインタビューの内容である。『略伝』の記述とプロシャント氏の語るところとを合わ

せると、誕生から死に至るまで、パルの足跡を概ね復元できるのではないかと思われる。

プロシャント氏とのインタビュは、筆者によつて、プロシャント氏のカルカタ（現コルカタ）の自宅で、二〇〇八年九月二四日午前一〇時〜午後一二時半と九月二七日午後五時〜午後八時五〇分の二回、六時間余にわたつて行われた。使用言語は主に英語で、時にベンガル語も使われた。プロシャント氏は八三歳の高齢ということであつたが、矍鑠としており、長時間のインタビュにもまったく疲れを見せなかつた。

一度目のインタビュでプロシャント氏は、日本のジャーナリストや研究者が歪んだパル像を広めてきたとして、強い警戒心を示した。また、プロシャント氏は何度もインタビュを受け、定型化した語りを身につけてしまつていくように見受けられた。困難なインタビュになることが予想されたが、しかし幸い、『略伝』をもらうことができたので、二度目のインタビュではこの『略伝』に書いてある事柄について、プロシャント氏に質問し、年代順にパルの生涯を辿るやり方を試みてみた。この方法はプロシャント氏にとって新鮮だったらしく、一回目とは打って変わつて、親密な雰囲気の中で思い出を生き生きと語ってくれた。

プロシャント氏は弁護士（an advocate）で、父パルの側近として前半生を過ごした人である。インタビュでは、父に非常に愛されたが、同時に、自分のキャリアを犠牲にしなければならなかつたと述べている。プロシャント氏がそういう立場から、偉大な父の業績を後世に残すために、また、自分の人生の証しとして、インタビュに応じているのは明らかで、同氏の談話に限界があることは否めない。しかし、忠実に父に付き従つた実の息子ならではの貴重な話を、いくつも聞いたことも事実であり、その点は強調しておきたいと思う。なお、談話を録音する準備をしたが、録音はしないことにし、メモを取つておいて、直後に文章化する方法を採つた。

第二は、ビモル・ラエ氏 (Mr. Bimal Ray) とシヨモル・ドット氏 (Mr. Samar Dutt) とのインタビューである。ビモル氏は、パルが一九六〇年から死の年まで会長を務めた、「フェデレーションホール協会」(Federation Hall Society) の事務局長 (Secretary) である。父親はパルと親しく、ビモル氏自身もパルに実の息子のように可愛がられたという。インタビュー嫌いといえられるプロシヤント氏とのインタビューが実現したのは、ビモル氏の仲介のお蔭であった。ビモル氏とのインタビューは、二〇〇八年九月二二日午後六時から七時、及び九月二九日午後五時半から六時半の二回、フェデレーションホールの事務室で、ベンガル語を使って行われた。他方、シヨモル氏はピアニストで、東京裁判当時パルが住んでいた家の家主の孫に当たる。インタビューは、二〇〇八年九月二四日午後六時半から七時過ぎまで、北カルカッタのシヨモル氏の自宅で、パルが借りた部屋を見せてもらったときに、英語で行われた。

第三は、文献調査で集めたデータである。これには先行研究に負うものも含まれるが、インド国立公文書館、インド国立図書館、大英図書館アジア・アフリカ資料室 (東洋・インド省コレクション)、オーストラリア国立図書館等における著者独自の調査の結果も含まれている。『カルカッタ週報』(The Calcutta Weekly Notes) 所載のパルの死亡記事については、山崎利男東京大学名誉教授からご教示いただいた。『週報』はカルカッタの法曹界で広く読まれている雑誌で、判例のほか、評論や消息記事を載せる。

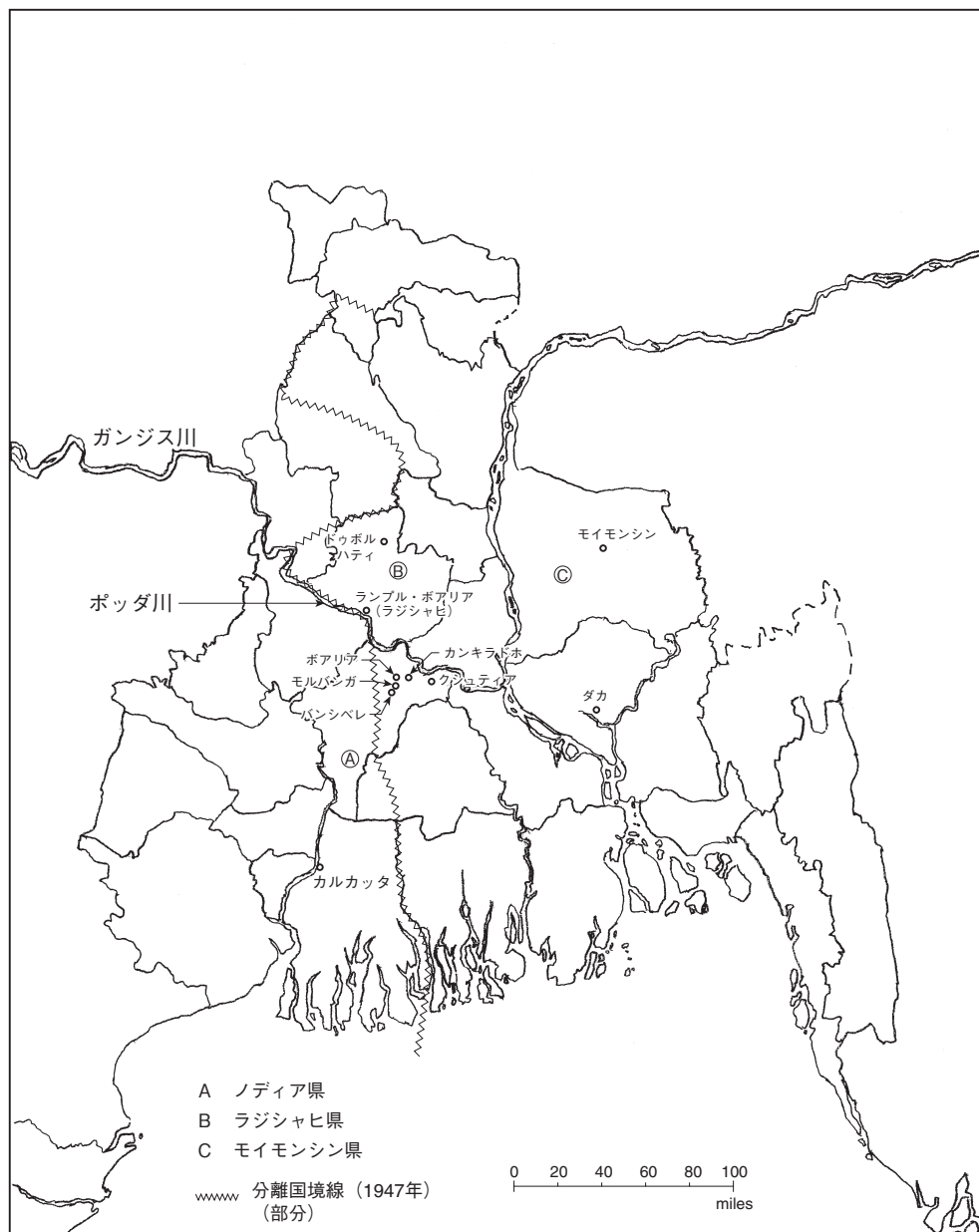
また、インドの歴史と社会に詳しくない読者のために、解説的な注をかなり加えた。

参考資料として、パルの死に際して全インドラジオが放送した弔辞のうち、元カルカッタ高等裁判所長官 P・B・チヨクロボルティによるものを訳出した。原文は英語である。弔辞という制約の大きな形式で書かれた文章であるが、カルカッタの法曹界でパルがどのように評価されていたか、読み取るのは難しくないように思う。

先に述べたように、本稿の目的は、『略伝』を軸にしてバルに関する伝記的なデータを整理することにある。本格的な考察は今後の課題としたい。現段階で述べておきたいのは次の二点である。

筆者は別稿で、バルの政治的志向性について触れ、バルは、中島岳志氏の主張するような、熱烈で一貫したガンディー主義者であったとは考えられず、むしろ、「特定の政党やイデオロギーを一貫して支持するようなことはなかったものの、基本的に、会議派の右派あるいはさらに右寄りの勢力、ないしは、チャンドラ・ボース、あるいはその両方に親近感を抱きつつ、状況に応じて柔軟に立場を調整しながら激動の一九四〇年代を乗り切った、広い意味におけるナシヨナリストだったようにみえる」と述べた「中里二〇〇八、七〇」。今回の調査でも私見を否定するような事実は出てこなかったこと、むしろ補強する重要な材料がいくつか得られたことを記しておきたい。確かに、プロシヤント氏にバルの政治的意見について質問すると、裁判官の仕事は原告・被告双方の主張を聴いて判決をくだすことである。したがって、バルが政党や政治思想に組したことはなく、もっぱら理性と法に基づいて意見書を書いたのであって、政治的背景などないという、断固たる答えが返ってくる。しかし、バルの経歴について詳しく訊ねてみると、プロシヤント氏自身の答えから、バルもやはり政治に近づき、関ってさえたことが浮かび上がってくるのである。バルと政治に関する証言と文献史料は、注二九、四六―五一、五五、五八に引いた。関心のある向きは参照されたい。これらのデータの解釈は慎重に行わなければならないが、バルが右寄りの政治的意見の持主であり、そればかりでなく、現実の政治にも関心をもつ人物であったことは確かのように思われる。

第二に、バルの生まれたベンガルは、十九世紀の半ば以来、注で言及したプロシヨンノ・クマル・タゴール、グルダス・バナジー、アシュトシュ・ムカジーを初め、傑出した法律家を輩出したところである。バルが非常に優れた成



地図：ベンガル州（1931年）と分離国境線（1947年）

功した法律家であったことは、今回の調査でも確かめられたところであるが、しかし、この偉大な系譜の中に置いたとき、やや小振りに見えることは否定しがたい。たとえば、パルはカルカタ高等裁判所の元判事とされているが、実は判事代理を短期間つとめたにすぎない。そういうパルを歴史に名をとどめる存在にしたのは、やはり東京裁判だったようである。東京裁判以後、パルは国際的な令名をもつただ一人のインド人法律家として、他に抜きん出た存在と見なされるようになった。この点は、パルの経歴を冷静に検討すれば容易に見て取れることであるが、まとまった資料としては、P・B・チョクロボルティの「弔辞」が、いかにもベンガル人らしい言い回しで比較的率直に語っている、参照に値するように思われる。

パル意見書の歴史的性格を論じるためには、パルの党派性とインド法曹界の学問思想の傾向とを明らかにしなければならぬと指摘したのは、家永三郎であった〔家永一九九八、八九〇九〇〕。また、最近意見書を批判的に分析した戸谷由麻氏は、パルと民族運動の関係を調べておく必要があると述べている〔戸谷二〇〇八、三三一〕。本稿はそういう方向へ研究を一步進め、パルの生涯をインド近代史、特にナショナリズムの歴史の中に位置づけ、意見書を適切な歴史的パースペクティブの中で捉えるための準備作業である。

なお、『略伝』はプロシャント・パル氏の許可を得て訳出するものである。本稿に示されている事実関係に関する判断やパルの歴史的な評価が、もっぱら著者の責任においてなされたものであることは言うまでもない。

1 〔田中二〇〇一、二二五～二二七〕、〔パール・田中二〇〇八、三〇〇～三〇九〕、〔一又一九六六、七四一～七五四〕、〔日暮二〇〇二、四〇五～七〕、〔中島二〇〇七、二四～五〇、二六八～二九二ほか〕、〔高木二〇〇八〕が主なものである。中島氏の

パル論に対する筆者の批判については、「中里二〇〇八」を参照。

- 2 一九六六年に日本を訪問したときは、プロシャント氏は「州営バス会社の法律事務担当社員」であると語っている「パール博士歓迎会 一九六六、一三」。

二 『略伝』 訳注

- (a) ベンガル語には敬語体があり、『略伝』では一貫して敬語体が用いられている。そのまま日本語に直すとくどくなるので、普通の書き言葉で訳出した。また、三人称代名詞の敬称の *giri*（「あのお方」）は「博士」と訳した。
- (b) ベンガルの固有名詞は原則としてベンガル語読みで仮名書きし、重要なものにはローマ字表記を付した。慣用的なローマ字表記がある場合は、それを優先した。仮名書きとローマ字表記にかなりズレがあるのは、ベンガル語では必ずしも綴りのとおりに発音しないからである。
- (c) 「」内は訳者の補足である。
- (d) 『略伝』を利用した先行研究として、[Nandy 1995] がある。ナンディは、父親がパルの友人だったと書き、比較的詳しくパルの経歴を紹介しているが、プロシャント氏は、そのような人物がパルの友人だったとは承知していないと語った。おそらく非常にたくさんいたパルの友人の一人だったのであろうということである。

ラダビノド・パル博士⁽³⁾ (Rādhābinod Pāl) の活動的で多彩な生涯は、ベンガルの名もないある村ではじまった。それは西暦一八八六年一月七日のことであった。村の名前はシャリムプル⁽⁵⁾ と言い、ノディア県にあった。村はボッダ川の辺りにあり、今はパキスタンのクシュティア県⁽⁷⁾ に入っている。父の名前は故ビピンビハリ・パル (Bipinbihārī Pāl)、母の名前は故モグノモイ・デビ (Maganamayī Debī) であった。博士が三歳のとき、父は遊行者となって村を捨てた。⁽⁹⁾ 家には、三人の幼子——ラダビノドと二人の姉妹⁽¹⁰⁾——を抱えて途方にくれる女性が残された。

パル博士は父親の情愛をあまり得られなかったが、母の溢れんばかりの愛情と、「父方の」祖父故ファラン・チヨンドロ・パル (Phyālān Candra Pāl) の慈愛に守られて成長した。七歳をすぎて八歳になった頃、博士は寺子屋に入った。この寺子屋は祖父が設立したものであった。⁽¹¹⁾ 博士はそこで並外れた知能があることを示し、規定よりもはるかに

3 ヒンディー語風に読めば、「ラーダービノド・パール」となる。

4 プロシャント氏によれば、これは誤植で、一八八六年一月十七日生まれということである。

5 Śālimpur: プロシャント氏によれば、シャリムプル村にはヒンドゥーとムスリムの両方が住んでいたが、ヒンドゥーが多数派で、ムスリムは貧しかったという

6 ガンジス川の本流は、ベンガルに入るとボッダ川と呼ばれる。

7 インド・パキスタン分離独立（一九四七年八月）の前には、クシュティアはノディア県の郡のひとつで、県の東北端に位置していた。分離独立のとき、ノディア県は分割され、パキスタン側はクシュティア県、インド側はノディア県となった。クシュティア郡は北辺をボッダ川に洗われ、郡全体が「非常に肥沃な幅広い沖積平野で、人口稠密」であった。一九〇一年の人口は四六八、三六八、一平方マイル当りの人口は約千人で、二つの町と二〇一一の村からなっていた [Garrett 1910, 176]。詩人の

ロビンドロナト・タゴールがこの郡のシライドホという村で青年期を過ごし、タゴール家の地所の管理を行ったことは、ベンガルではよく知られている。

- 8 バルの両親のカーストは「クンボカル」(Kumbhakar: クマルあるいはクモルともいう)であった。「クンボカル」の伝統的な職業は「陶工」である。

ベンガル地方のカースト制度の序列では、バラモン、ボイッド(医師)、カヨスト(書記)の三カーストが最上位グループを形成し、その次に「ノボシヤク」(「九つの枝」の意味)と呼ばれる九つの職人／サービス・カーストのグループが来る。「クンボカル」は、「ナピト」(床屋)、「コロモカル」(鍛冶工)、「タンティ」(職工)等とともに、この「ノボシヤク」の一つに数えられる。一九三一年の国勢調査によれば、ベンガル州のヒンドゥー全体の人口の中に占める最上位三カーストの比率は約一二パーセント、「ノボシヤク」のそれは約一四パーセントであった。バルは低いカーストの出身と言われることがあるが、それはバラモン等と比較したときのことである。むしろ中位のカーストに属したと言うのが妥当であろう。

- 9 プロシヤント氏によれば、シャリムブルの家は、茅葺きの農家と小屋の二棟からなり、母屋には部屋が三室あった。バルの父は土地持ちの農民で、自らは耕作せず、土地を刈分小作に出していたという。『略伝』にあるように、祖父が寺子屋を開いていたことや、伯父に店をもっていた人がいたことを考え合わせると、バルが貧しい家に生まれたというのは当たらないようである。むしろ中農クラスであった可能性が高いように思われる。父を早く失ったために苦労したということではなからうか。

- 10 プロシヤント氏によれば、バルには姉と妹が一人ずついた。ベンガル語では普通、英語と同様、兄と弟、姉と妹を区別しない。伯父(母)と叔父(母)についても区別が曖昧になることがある。原文では年齢差が分からないので、これらの単語は便宜的に、兄、姉、伯父(母)等と訳すことにする。

- 11 プロシヤント氏によれば、バルが最初に入ったのは、イマニ・ボンディットという名のムスリムの教師が教える寺子屋であっ

前に寺子屋の勉強を修了した。その次は下級小学校「入学」試験であつた。博士は優等で合格し、同時に毎月二ルピーの奨学金を獲得した。「下級小学校はバンシベレにあつた。」博士は、モルバンガから二マイル離れたバンシベレ⁽¹²⁾にある「母方の」伯母の家に身を寄せた。しかし、身を寄せる場所はなくなり、すぐさまもう一つ困つた問題が生じた。

「母方の」伯父がボアリアに住んでいて、この人がパル博士に店を手伝つてほしいと声をかけたのである。伯父の店であらゆる仕事をしながら、十二歳の少年は川を渡つて伯母の家にやつてきて、そこからバンシベレ下級小学校⁽¹³⁾に通つた。そのため毎日決まつて遅刻したものであつた。このとき博士は二年生のクラスで勉強していた。家計が逼迫していたので、「父方、母方両方の」伯父たちは、パル博士の勉強はもうこれ以上それほど続けられない、むしろ勤めをさせるのがよいと知らせてきた。仕方なくラダビノドは食品雜貨店に勤め先を得た。月給四ルピー。この時わずかに十一歳であつた。しかし母はこんなふうにして希望を捨ててしまうことを決して肯んじなかつた。彼女は名も知れぬ村の無学な女性であつたが、胸の内では、息子を一廉の男にしなければならぬ、息子が世界的な名声を得るようになければならぬ、という強い願いをもつていて、それは誰も押さえつけることのできないものであつた。⁽¹⁴⁾彼女は、

た。祖父の寺子屋で学んだのはその後のことであるという。

「ボンディット」(「パンディット」)は学識のあるバラモンの使うタイトルであるが、十九世紀までのベンガルでは、ヒンドゥーとムスリムの区別はかなり曖昧であつた。ここでは「ボンディット」の語は、単に「学問のある人」という意味で使われているのである。イマニ・ボンディットは初め無料で教えてくれたが、謝礼を払わなければならぬ、寺子屋を移らざるを得なかつた。お金がないと言うパル少年に対し、イマニ・ボンディットは、初学のうちは自分の目で見て学ぶことがたく

さんある、一銭もお金がかからないではないか、と言って慰めたという。

12 村名。おそらく、そこから寺子屋に通った祖父の家が、この村にあったのであろう。

13 村名。プロシヤント氏によれば、「バンシバリア」とも言う。

14 プロシヤント氏によれば、伯父の家で与えられた仕事は、甥の学校への送り迎え、料理、店の帳簿付け等であった。

15 四年制で、小学校一年生から四年生に相当する。なおベンガルでは、日本とは逆に学年を数え、最上級生が一年生となる。

16 ベンガル語で「ムディ」(mudi)。どの村にもあるよろず屋で、村人を相手に金貸しをすることもあった。

17 プロシヤント氏によれば、パルの母はサー・グルダス・バナジー (Sir Goorodas Banerjee, 1844-1918, ボンドバッタエ Bandyopadhyay とも言ふ) の写真を一枚もっていて、息子をこのような男にするのだと言っていたという。グルダスは西欧式の教育を受けた超一流の法律家であったが、同時に、国民教育の振興に尽力したことでも知られる。

グルダスはカルカッタの普通の会社員(カーストはバラモン)の息子として生まれ、二歳のときに父を失った。しかし母は非常に意志の強い人で、はつきりとした目標をもち、それに合わせて息子を育て上げたと言われる。グルダスは、名門校のプレジデンシー・カレッジ (Presidency College) で数学を学び、学士試験、修士試験ともに第一クラス首席の成績で、大学金メダルを獲得した。数学の修士試験の準備をしているときに、法学を学びはじめ、法学士の試験でも第一クラス首席となり、大学金メダルを得た。第一クラス首席というのは、成績最優秀者のグループの中の一番という意味で、インドの高等教育ではそれを取るのには非常に名誉なこととされ、この成績は一生ついてまわる。グルダスはカレッジで数学を教えるかたわら法学士号を得ると、カルカッタ高等裁判所の弁護士として登録し、法律家としての人生を歩みはじめた。その後、一八七七年、法学博士、七八年、カルカッタ大学タゴール法学教授、八八年、カルカッタ高等裁判所判事と順調にキャリアを積み、九〇年にはインド人として初めてカルカッタ大学副学長となった。副学長としては、ベンガル語などのインド諸語を大学教育に導入することを主張した。一九〇四年、引退を表明すると、ナイトに叙せられた [Sen 1972, vol.1, 110-113] [Sinha 1968, 297-302]。以上の経歴

あるいは誰か雅量のある紳士が、この無力な少年が勉強するのを援助してくれるのではないかと考えて、息子に遠くの学校へ手紙を書かせた。

慈悲深い神の祝福により、援助の手が差し伸べられた。クムデイ下級小学校の教員故クリシュノラル・チョウドゥリ氏が、学校に身を寄せさせてくれた。⁽¹⁸⁾ 博士はこの学校から下級小学校課程修了試験を受験し、プレジデンシー地方全体で一番の成績で合格した。博士はクムデイを去り、クシュティアのクシュティア上級小学校に来了。そこで身を寄せたのは、コモラプル・ジャロビのザミンダール、故ラムチョンドロ・ラエチヨウドゥリ氏の屋敷であった。当時の規則では、下級小学校の修了試験に合格すると、「上級小学校の」四年生のクラスに入学することになっていた。ところがクシュティアの校長故オムビカチョロン・ムコバッタエ氏は博士の学力を見て、三年生に入学させ、十二月の学年末試験を受験させた。その試験でも博士は一番であった。博士は二年生に進級させてもらった。二年生で勉強する途中、博士はクシュティアを去り、ラジシャヒ県のドウボルハティに行つた。⁽²⁰⁾ 費用は全て当地のザミンダールが負担した。一九〇三年、博士はこのドウボルハティ・ラジャ・ハラナト高等学校からカレッジ入学資格試験を受け、

は、パルのそれと驚くほどよく似ている。パルの人生において、母の力は非常に強かったと見るべきであろう。

18 パルが勉学を続けた経緯について、プロシャント氏は次のように説明している。ある紳士が、食料雑貨店で働くバルに同情して、学校に行きたくないかと訊ねた。バルが行きたくないと言うので、何故かと訊くと、金がないという答えであった。金がないので学校に行けるとしたらどうするか、とさらに訊くと、行きたくない、伯父の許可がいるから、という答えが返つてきた。そこで紳士は伯父たちと話をつけ、勉強を続けられるようにしたという。

19 当時のベンガル州は二五の県(District)からなっていた。地方(Division)は州と県の間の中間的な行政単位で、五つあった。

プレジデンシー地方 (Presidency Division) はその一つで、ノディアなど五つの県を含んでいた。

- 20 ノディア県クシュティア郡の郡役所所在地。一九〇一年の人口は五、三三三。内訳は、ヒンドゥー、三、〇六六、ムスリム、二、二三五、クリスチャン、二九であった。ポッター川の支流ゴロイ川の右岸に位置し、東ベンガル鉄道の駅があった。米、豆類、糖蜜、ジュートの集散地であった [Garrett 1910, 176-178]。

- 21 ベンガル地方の地主階級のこと。系譜的には中世の地方領主層や官職貴族層に起源をもち、単に農民から地代を徴収するにとどまらず、農村社会の秩序を維持する支柱として大きな力を振るっていた。彼らは指導者としてさまざまな社会的役割を果たすことを期待されていたが、その中には学芸の保護者となることも含まれていた。ザミンダールを中核とする植民地的な土地制度 (ザミンダリー制) は、一九五三―五五年の土地改革によって廃止された。

- 22 ラジシャヒ県の北部にある村の名。村には郵便局と電報局があった。

この村にはドウボルハティ家というザミンダールの屋敷があった。「家」の原語「ラージ (raj)」は「王」を意味する接尾語であるが、ザミンダールは王ではないので、ここでは「家」と訳する。ドウボルハティ家は五四代の歴史を有すると主張する古いザミンダールで、ベンガルの有力な商人カーストであるシャハ (Shaha) に属した。一九世紀後半の当主ハラナト・ラエチョウドゥリは、飢饉救援の功などを認められ、植民地政府から、一八七五年に「ラージャ (Raja)」、七七年に「ラージャ・バハール (Raja Bahadur)」の称号を使うことを許された。ハラナトは、村に診療所と高等学校を設立し、毎年五千ルピーの地代収入のある土地財産を政府に寄付して、ラムブル・ボアリア (別名ラジシャヒ) の官立学校をカレッジに昇格させるための資金とした [O'Malley 1916, 161-162]。

- 23 前注を参照。一九一五年におけるこの高等学校の生徒数は二二一人であった [O'Malley 1916, 151]。

- 24 初中等教育を修了した者はカレッジ入学資格試験を受け、合格すればカレッジ (college) に進んだ。カレッジには序列があり、進学先として選べるカレッジは資格試験の成績によって決まった。カレッジは大学 (university) と連携 (affiliate) し、その傘

合格した。同時に毎月八ルピーの奨学金を得た。

入学資格試験に合格するとすぐさま、パル博士はラジシャヒに行った。一九〇五年、ラジシャヒ・カレッジ⁽²⁵⁾で学士号予備試験に合格した。今度も奨学金を獲得した。しかしラジシャヒに滞在していた時、博士は奨学金を全額、家計費として母に送っていた。自分自身は刑務官補の故ディノボンドウ・パル氏の家に住んだ。しかしディノボンドウ氏が転勤になったので、パル博士はカレッジの寮（ヘモントクマリ寮）に身を寄せなければならなかった。月額六ルピーの寮費は、カレッジの英文学教授、故ラカルダシュ・ゴーシュ氏が支出した。最終試験の前、ある困難がおきた。受験料が手元になかった。しかし今度も神が費用を見つけてくださった。パル博士の友人、故テジェンドロ・シンホシヨルカル氏が費用を出して博士を援助した。

パル博士が故ブルノチョンドロ・パル氏 (Purnacandra Pal) の知遇を得たのは、ラジシャヒでディノボンドウ氏の家に滞在していたときのことであった。この人は避雷針検査官であった。学士号予備試験に合格したので、パル博士はカルカッタにやって来て、ベリアガタの故ブルノチョンドロ・パル氏の家に滞在した。⁽²⁶⁾ここに住んでいた時、一九〇七年、パル博士はプレジデンシー・カレッジ⁽²⁸⁾で数学の優等学士の試験に合格した。その後、一九〇八年、数学の修士試験に合格した。⁽²⁹⁾

の下で学士課程の教育を行った。

25 ラジシャヒ県の県庁所在地ラムブル・ボアリア（別名ラジシャヒ）にあった官立カレッジ。一九一五年の生徒数は四五三。

ハラナト・ラエチヨウドウリの寄付については注二二を参照。敷地内にマドラサやダルガー（聖者廟）の建物がある、独特の

雰囲気のカレッジだったようである。

ラムプル・ボアリアは、ボツダ川に面し、十八世紀には絹取引の中心地の一つで、オランダの商館があった。パルの卒業後のことになるが、この町にバレンドロ研究協会 (Varendra Research Society) が設立され、北ベンガルの考古学的・民俗学的研究の中心となった。一九一一年の人口は二三、四〇六。その内ヒンドゥーが一二、九八一、ムスリムが一〇、三二五であった [O'Malley 1916, 151, 179-184]。

26 カルカッタの東郊にある地域の名。シアルダ駅の東側に当たる。工場が多いところである。

27 ビモル氏によれば、プレジデンシー・カレッジで勉強しているとき、パルはカレッジの近くのミルザプル街の「メス」(mess)に住んだという。そういう時期もあったのであろう。「メス」というのは、仕事や勉強のためにカルカッタに単身で出てきた男たちが共同生活をするシステムで、費用を出し合って買物と料理と食事を一緒に行った。

28 プレジデンシー・カレッジ (Presidency College) は当時のインドで最高のカレッジと見なされ、全インドから俊才が集まった。このカレッジで学士号を取った後、オックスフォード大学やケンブリッジ大学に留学するのが最高のエリート・コースであった。この名門校の歴史は、一八一七年、インドで最初の英語による高等教育機関として設立されたヒンドゥー・カレッジ (Hindu College) にまで遡ることができるとされることもある。プレジデンシー・カレッジとして正式に発足したのは五五年にある [Presidency College 1956, chs. 1 & 2]。

この前後の記述から、パルは優秀な学生ではあったものの、数学では学士試験でも修士試験でも、一番になれなかったことが分かる。なお、何故パルが数学を専攻したのか、プロシヤント氏に質問したが、理由は知らないということであった。グaldas・バナジーが初め数学を専攻したことは注一七で触れた。もう一人の代表的な法律家、アシュトシュ・ムカジー(注四七参照)もまず数学を学んでおり、数学と法律を一緒に学ぶことは、当時の秀才の間で一種の流行だったのかもしれない。

29 プレジデンシー・カレッジ時代のパルの交友関係については、現在のところビモル氏の父のことしか分かっていない。

訳注『ラダビノド・パル博士(一八八六〜一九六七)略伝』

ビモル氏によれば、父はオナトナト・ラエ (Anātmān Rāy: 1888-1970) と言い、パルと同じノディア県出身で、著名なコブラジ (インド伝統医学の医師) であった。パルより二歳年少であるが、プレジデンシー・カレッジで学んでいるときに知り合い、親友として生涯交遊が続いたという。

オナトナトは一九〇五年のベンガル分割反対運動に参加し、以後「ジュガントル」(Yugāntar: 革命の意) と呼ばれる有力なテロリスト・グループに属して、インド国民会議派の民族運動に関つた。四三年から四四年にかけて、カルカッタ市のジョラシャンコという地域で、サイゴンから送られてくるチャンドラ・ボースの放送を聞き、その内容をビラにして極秘に配布して回るグループが活動し、官憲がウシャー・メヘターという女性を検挙する事件があつた。ビモル氏によれば、父のオナトナトはこのグループのメンバーで、彼が自宅で開く秘密会合にパルが顔を見せていたという。この時期、オナトナトもパルも、カルカッタ市北部のビードン街に住んでいた。

ところで、ベンガル州の政治情勢に関する秘密報告書は、一九四四年二月後半、カルカッタ市内で「インド人へ訴える」と題するビラが撒かれたことを報告している。このビラは、チャンドラ・ボースを最高司令官とするインド国民軍が、無敵の日本軍とともにアラカン国境を総攻撃するから「インパール作戦をさす一筆者」、軍勢がインドに達したときに反英米独立反乱に立ち上がるべく準備せよ、と呼びかけていた [Confidential Report on the Political Situation in Bengal for the first half of March 1944, L/P&J/5/151, India Office Records, The British Library, London] これを撒いたのがウシャーとオナトナトのグループだったのかどうか不明であるが、彼らのグループが配布したビラが同様の内容のものであったと考えて、ほぼ間違いないであろう。

ビモル氏の証言は、東京裁判でパルの同僚であつたオランダ代表判事レーリンクの回想と一致する。レーリンクは晩年のインタビューで、カルカッタのバル宅に泊まったことがあると述べ、さらに「インドの判事は植民地的な関係について心底から憤慨していた。．．．だから、アジア人をヨーロッパから解放するこの戦争、そして『アジア人のためのアジア』というスローガンは、ほんとうに彼の心の琴線に触れるものであつた。彼は、イギリスに対して日本とともに戦つたインド軍に関つたこと

わえあつた」[Röling & Casseese 1993, 2829] [「レーリンク／カッセーゼ、一九九六、五〇～五一」と語っている。

ところが、プロシヤント氏にレーリンクの証言について質問すると、プロシヤント氏は書棚から本を取り出し、該当箇所を筆者に読み上げさせ、バルがチャンドラ・ボースやインド国民軍に関ったことはないと言明した。その場に居合わせたビモル氏は、納得できないという表情だったが、黙って聞いていた。

ビモル氏とレーリンクがまったく異なる文脈の中で証言しながら、同じ趣旨のことを述べていることを考えると、バルが何らかの形でチャンドラ・ボースとインド国民軍に関った可能性が高いとみるのが妥当であろう。しかし、プロシヤント氏が強く否定している以上、当面この問題には二通りの証言があるとしておいて、新しい事実が出てくるのを待つほかないように思われる。もしバルが、粟屋氏の言うように、インド国民軍に関与し、その政治思想がチャンドラ・ボースに近かったということになれば〔粟屋一九九六、二四九〕、バル意見書は、一定の政治的背景の下に書かれた可能性のある文書として、読み直さなければならなくなるであろう。

チャンドラ・ボースは、一般的には、国民会議派の左派あるいは急進派の指導者とされる。しかしボースの左翼主義は、ネルーのそれとは異なり、かなり漠然としたものであった。その実体は、ガンディーとその支持者たちを右派と決めつけて、党内の反ガンディー派を自分の下に結集させるためのスローガンにすぎなかった、と見ることにさえ可能である。この他、ボースの左翼急進主義の問題点として、次の二点を指摘することができる。

周知のように、ボースの急進主義は、インド解放のためには武装闘争も辞さないとするものであった。この路線の中から、ドイツや日本と協力して武力でインドの独立を勝ち取るという方針が生まれた。それと同時に見逃せないのは、ボースの武装闘争路線の中に、植民地支配の閉塞状況の下で成長した、革命的テロリズムの潮流が流れ込んでいた点である。しかし、少数のエリートによる一人一殺の革命的テロリズムは、ガンディーの大衆的ナショナリズムが確立した後では、完全に時代遅れのものとなっていた。この意味では、ボースは時代に追い越された、アナクロニズムの政治家であった。

プレジデンス・カレッジで学士課程の勉強をしているとき、博士は故ブルノチインドロ・パル氏の長女、故ノリニバラ (Nalinibala) と目出度く結婚した。⁽³⁰⁾ 修士号の試験が終わるや、パル博士はアラールハーバードで社会人の道を歩み始めた。アラールハーバード主計長官の役所で二年間、事務官の仕事をしたのである。博士がカルカッタ大学で法学士の試験に優等で合格したのは、アラールハーバードで勤めをしているときであった。⁽³¹⁾ そしてついに数学教授の職を

もう一つ問題となる点は、右翼的な政治潮流との関係である。国際政治においては、ボースはファシズムに親近感を示した。

ボースは、一九三三年、ムツソリーニと会ってファシズムに思想的に共鳴し、一時期、ファシズムと共產主義の綜合を構想したことがあった。三六年には、ヒットラーに会見を申し込んで断られる出来事があった。国内政治においては、右翼のヒンドウ大協会の政治家たちとも連携して活動し、例えば、三九年のカルカッタ市議会選挙では、ボース・グループはヒンドウ大協会と選挙協定を結んだ。(以上、取りあえず [Chakrabarty 1990] を参照)

このように見てくると、パルの右寄りの政治的志向性が、ボース流の左翼急進主義と必ずしも矛盾するものではなかったことが理解されよう。

もしパルがボースとインド国民軍に近かったということになった場合、次に取り上げられるべき興味深い論点は、パルが、ボースと東條英機の間をどのように見たかという問題であろう。両者の間には、例えば次の経緯が示すように、密接な関係が形成されていた。

日本政府は、一九四二年四月、ボースを日本に招致することを決定した。このときの首相は東條であった。四三年五月、東京に到着したボースと会見した東條はボースに魅惑され、インドの独立運動を援助することを確約した。六月、東條は帝国議会での演説で、援助を公式に約束したが、そのときボースは傍聴席にいて演説を聴いていた「レブラ一九六八、一四六―一四七」。^(補注一)

30 プロシャント氏によれば、ディノボンドウ・バル氏にもブルノチョンドロ・バル氏にも娘がいた。ラジシャヒ・カレッジの学監がディノボンドウ氏の友人で、娘婚にふさわしい優秀な青年がいると持ちかけたのが、結婚話の発端であった。ところがディノボンドウ氏が転勤になってしまったために、この話は流れ、ディノボンドウ氏が友人のブルノチョンドロ氏にバルを紹介し、バルはブルノチョンドロ氏の娘のノリニバラと結婚した。両氏は娘を将来有望な青年に嫁がせるために、積極的にバルの面倒をみたのだという。

ノリニバラは有能な主婦であった。プロシャント氏は、バルは家庭のことは何もできない人で、母に頼り切っていたと回想している。

バルはノリニバラとの間に十四人の子供をもうけた。息子は四人で、長男がプロシャント (Prasanta, 弁護士)、次男がプロノブ (Pranab, カルカタ高等裁判所及びインド最高裁判所の法廷弁護士)、三男がプロティプ (Pratip, 弁護士)、四男がプロトゥル (Pratul, 地質学を学んだ後、会社員) である。娘の一人は医師に嫁ぎ、母の死後、父の世話をした。その他、バルには養女が一人いて、シャドナ・シヨルカル (Sadhana Sarkar) といった。彼女は女性として初めて法学修士号を取り、カルカタの名門カレッジの一つ、シティー・カレッジ (City College) の校長になった。

31 プロシャント氏によれば、バルが法学を学びはじめたのは、プレジデンシー・カレッジに在学していたときであるという。他方、日暮氏によれば、バルは「リボン・ロー・カレッジ」で法律を学んだという [日暮二〇〇二、四〇六]。

32 プロシャント氏によれば、バルは勤めをする傍ら教授の公募に応募して、アノンドモホン・カレッジ (Anandamohan College) に教授の職を得た。ただし、当時はカレッジの教員はすべて「プロフェッサー」と呼ばれた。バルが特に優秀だったから、若くして教授になったわけではないという。

他方、死亡記事によれば、バルは一九一一年にアノンドモホン・カレッジの「講師」に任ぜられたと云う [Obituary, 1967, 31]。おそらくこちらの方が正しいのであろう。

得て、博士はモイモンシン⁽³³⁾に向かった。月給一五〇ルピーであった。モイモンシン時代にバルは、数えきれないほどの学生や友人や親類を、宿舎の世話、経済的援助、その他さまざまな方法で、できるかぎり助けた。実際、この頃から始まって長い生涯の終わりの日まで、博士は他人の幸福を願って、我が身を顧みることがなかった。人生航路でどんな状態にあるときも、この生き方を裏切ることにはなかった。⁽³⁴⁾ そうするうちにも、博士は時間をつくって、法学修士試験の準備を進めていた。一九二〇年、博士は「カルカッタ大学の」法学修士試験に第一クラス首席で合格した。⁽³⁵⁾

一方、博士は一九一七年三月二日に、カルカッタ高等裁判所の弁護士に登録していた。⁽³⁶⁾ しかし法曹界に入って弁護士を開業したのは、一九二一年、モイモンシンから「カルカッタに」戻ってきてからのことであった。⁽³⁷⁾

アノンドモホン・カレッジは、東ベンガル・アッサム州政府の予算と大ザミンダールの寄付によって、一九〇八年にモイモンシンに設立された新設校であった。一九一五年の生徒数は五三七。その内八六名がムスリムであった。当時は、ジュート栽培で富裕になった東ベンガルのムスリム上層農民の子弟が、カレッジに進出しはじめた時期にあたる [Sachse 1917, 140-41]。新設校だったこともあり、カレッジは活気に満ちた雰囲気包まれていたことであろう。

33 旧名ナシラバード。現在バングラデシュにある町の名。当時はベンガル最大の県モイモンシンの県庁所在地であった。一九一一年の人口は二一、一〇九。当時としては珍しく、水道設備をもった [Sachse 1917, 135, 154]。ナシラバードの名は十五世紀末まで溯ることができる。

34 ビモル氏は、バルは母親のように情愛のあつた人だったと回想している。この形容句は、ベンガル社会では男にも使われ、褒め言葉の一つになっている。また、プロシャント氏によれば、バルは学生の面倒をよくみる教授で、住む場所に困っている学生がいたら、自分で寮の空き部屋を探し、空気がないと自宅に泊まらせていたという。

35 プロシヤント氏は、バルがたった一回の受験で合格したことを強調していた。

36 ベンガル語で「ウキル」(ukil, vakil)。an advocate, a pleader と英訳される。

37 死亡記事によれば、バルは、モイモンシンで数学を教えていたときに、既に弁護士業を始めていた。また、カルカッタに出て、カルカッタ高等裁判所で弁護士登録をしたのは、アシウトシュ・ムカジーに勧められたためであるという [‘Obituary’ 1967, 32]。バルは早くから、ムカジー家と密接な関係をもっていたことになろう。ムカジー家については注四七を参照。

他方、プロシヤント氏によれば、バルがモイモンシンの教授職を投げ打ってカルカッタに戻ったのは、故郷の村で病床にあった母を看護したときに、グルダス・バナジーのようになってほしいと、強く望まれたためであった。義父のブルノチョンドロは、収入が減るので、バルが教授をやめるのを快く思っていなかったという。

いずれにせよ当時は、法学修士試験で第一クラスに入っていれば、希望さえすれば、カルカッタ大学法学部で授業を担当させてもらうことができた。そこでバルはまず法学部講師として週に二、三コマの授業を担当した。それと同時に、弁護士を開業したのである。

法学部では、バルはすべての学年のあらゆる科目を教えた。一方、弁護士としての専門は、当時はまだ新しい分野であった、所得税法であった。バルは所得税法関係の弁護士として成功し、カルカッタの著名な弁護士の一人となった。バルに一時部屋を貸したドット家の当主シヨモル氏によれば、ドット家はカルカッタ有数の旧家で、紙の卸業で産を成した富豪であった。祖父の代にバルを所得税法の顧問弁護士として雇っていて、その関係でバルに邸宅の一部を貸すことになったということである。

プロシヤント氏の話に戻れば、バルは、国際法やイスラーム法も含め、あるゆる分野に深い学殖をもつ法律家だったが、刑法関係の事件だけは引き受けたがらなかったそうである。興味深いエピソードとして、プロシヤント氏は、死刑判決を受けたムスリムの被告の再審事件の弁護をバルが敢えて引き受け、無罪判決を勝ち取った顛末を語ってくれた。また、シヨモル氏は、裁判官時代のバルが、極刑を下さなければならぬことに悩み、妻と相談したと聞いたことがあると述べ、バル夫妻が相談し

一九二三年から一九三六年まで十三年もの間、博士はカルカッタ大学⁽³⁸⁾法学部 (Law College) 教授の地位にあった。一九二四年、博士はカルカッタ大学の法学博士の学位を得た。研究題目は、「マヌ法典以前のヴェーダ時代及びポスト・ヴェーダ時代におけるヒンドゥー法哲学⁽³⁹⁾」であった。

一九二五年、博士はタゴール法学教授⁽⁴⁰⁾となり、講義を行った。講義の題目は、「長子相続法——特に古代及び近代のインドとの関連において⁽⁴¹⁾」であった。

一九二七年から一九四一年まで、パル博士は所得税法に関するインド政府の法律顧問であった⁽⁴²⁾。

た部屋に案内してくれた。

プロシャント氏によれば、パルは法についてきわめて明快な観念をもっていて、数学者＝法律家は「mean...」などとは決して言わない、というのが口癖だったそうである。

- 38 一八五七年に、ボンベイ大学、マドラス大学とともに設立された、インド最古の大学の一つ。一九六〇年頃まではインド随一の大学と見なされていた。特にパルが在職した三〇年前後はこの大学の最盛期とされ、教授陣に各分野の権威者が揃っていた。例えば、物理学科には、ラマン効果の発見により三〇年にノーベル物理学賞を授与されたC・V・ラマン (C.V. Raman)、哲学科には、後にインド大統領となったラーダークリシュナン (Sarvepalli Radhakrishnan) がいた [University of Calcutta 1957, 332-38]。

- 39 'Hindu Philosophy of Law in the Vedic and Post-Vedic Times prior to the Institutes of Manu'.

法学者としては、パルはロスロウ・パウンド (Roscoe Pound, 1870-1964) の影響を受けた ['Obituary' 1967, 32]。パウンドはアメリカの植物学者・法学者で、社会学的法学を唱え、裁判所行政の改革を主導した。その法理論は、ニューディール関

連法の立法に援用された。社会学的法学とは、法を社会的事実との関係でとらえ、法学を社会工学の視座から把握する相對主義の立場を主張する、プラグマティズムの立場にたつ法学のことをいう〔田中編一九九一、七八九〕。

40 タゴール法学教授のチェアーは、一八六九年にプロシオン・クマル・タゴール (Prosunno Coomar Tagore, 1801-1868) の遺贈によって設けられた [University of Calcutta 1957, 106]。カルカッタ大学は五七年に設立されたが、当初は、傘下のカレッジのカリキュラムを定め、試験を実施し、学位を授与するための機関として位置づけられ、通常の大学としての実体をもっていなかった。タゴール法学教授は、カルカッタ大学に初めて設けられた教授職で、これをきっかけに大学で講義が行われるようになり（教室はまだなかった）のでプレジデンシー・カレッジで講義が行われた）、カルカッタ大学が教育・研究機関として発展する起点となった。タゴール法学教授はバーマネントの職ではなく、一年で交代したが、講義は "Tagore Law Lectures" シリーズとして刊行された。このシリーズは現在でも、インド法研究の重要な資料となっている。プロシヤント氏によれば、タゴール法学講義の報酬は、九千ルピーという破格の金額だったそうである。

プロシオン・クマルは有名なタゴール家の一員であるが、詩人のロビンドロナト・タゴールとは異なる家筋に属する。インド人法律家の草分けの一人で、インド政府弁護人 (Government Pleader) を長く務め、英領インド協会の創立、カルカッタ大学の新設、カルカッタ弁護士会 (Calcutta Bar) の設立等に関わった。カルカッタ大学本部の大階段正面には、プロシオン・クマルの大理石の彫像が今でも置かれている。

41 'The Law of Primogeniture with special reference to India, ancient and modern'.

42 所得税法は中央政府の法律であるが、プロシヤント氏によれば、パルはカルカッタ高等裁判所の管轄範囲だけを担当し、実質的にベンガル州政府弁護人として仕事をした。ベンガル州における所得税法事件の書類はすべてパルのところを通ったという。パルと所得税法については、注三七も参照。

43 'History of Hindu Law in the Vedic Age and in the Post-Vedic Times down to the Institutes of Manu'.

訳注『ラダビノド・パル博士（一八八六〜一九六七）略伝』

一九三〇年、博士は再びカルカッタ大学タゴール法学教授となった。今回の講義題目は「ヴェーダ時代、及びマヌ法典までのポスト・ヴェーダ期におけるヒンドゥー法史」⁽⁸⁾であった。

一九三七年、ハーグで比較法会議の第二回会議が開催されたが、この会議において博士は、比較法国際協会の副会長に選出された。

一九三八年、博士は三たびカルカッタ大学タゴール法学教授に指名された。今回の博士の講義の題目は「国際関係における犯罪」⁽⁹⁾であった。カルカッタ大学の歴史において、このような榮譽に浴するのはきわめて稀なことである。

一九四一年一月二七日、博士はカルカッタ高等裁判所判事に就任し、一九四二年九月二日までその職にあった。その後、同年一二月一日、再び判事席に座り、一九四三年六月二三日まで在任した。⁽¹⁰⁾

一九四四年、博士はカルカッタ大学副学長に就任した。⁽¹¹⁾一九四六年、博士はこの職から引退した。⁽¹²⁾

44 Congress of Comparative Law.

45 'Crimes in International Relations'. この講義は一九三八年の枠を使うものであったが、実際には一九五一年に行われた ['Obituary' 1967, 31]°

46 パルの高裁判事在职期間は短く、しかも二期に分かれている。プロシヤント氏によれば、当時高裁判事の定員に空きがなく、パルは休暇 (absence) 中の判事の空席 (vacancy) を埋めるかたちで就任したのだという。この説明は、カルカッタ高裁百年史がパルを判事代行 (Officiating) とし、⁽¹³⁾ パルの退任を 'resign' ではなく 'vacate' として他の判事から区別していることと符合する [High Court at Calcutta 1962, 242]°。また、パルが僅か二年半で判事を辞め弁護士に戻ったのは、普通裁判官 (a puisne judge) への昇格を待っている間に、別人が普通裁判官に任命されたため、名誉ある辞職を選んだということのようであ

を『Dr. Radhabind Pal 1943, 64』。

バルが在職した一九四〇年代前半、カルカッタ高裁長官はイギリス人であり、判事の約半数もイギリス人であった [High Court at Calcutta 1962, 227-46]。高裁判事の職は、植民地社会の中でインド人が望みうる最高の職の一つで、給与も格段に高かった。

なお、戸谷氏は、バルが高裁で判事として関った約六〇件の裁判をすべて調査し、バルが一度も反対意見を書いたことがないことを明らかにし、「東京裁判以前のバルは、現状維持の姿勢をとる中道ないし保守的判事の役目をはたすことを常とした」と結論している [戸谷二〇〇八、三三〇～三三一]。

プロシヤント氏によれば、バルが下した判決のなかで有名なものは、「デボットル」(debottar sampatti)に関するものであった。「デボットル」とはヒンドゥー寺院に寄進された土地財産のことで、免税地とされるが、この判決でバルは、'Deity can be taxed' という名台詞を吐いて、課税を認めたという。

47 バルが副学長に在任したのは、一九四四年三月十三日から四十六年三月十二日までである [University of Calcutta 1957, 427]。

副学長の任期は二年であるから、バルは任期満了で職を退いたことになる。しかし、プロシヤント氏は、バルが一期だけしか副学長を務めなかったことを強調した。何らかの理由で二期目統投がかわらず、田舎に引きこもったという推測が成り立ちそうである。なお、バルが副学長をやめて東京裁判の判事になったという説があるが、それは誤りである。バルは、判事に任命されるおよそ一カ月前に、任期満了で副学長をやめていたのである。

カルカッタ大学副学長の一覽表を見ると、バルの経歴が見劣りするの否定したい [University of Calcutta, 1957, 421-428]。バルがどういう経過で副学長に選任されたのか、事情を審らかにしないが、考えられる背景としては、まず、当時、医学部と法学部が交互に副学長を出す慣行があり、前任者が医学部の B・C・ロイだったことがあろう [Dr. Radha Binode Pal 1944, 39]。また、バルが、カルカッタ大学に大きな影響力を持っていたアシュトシユ・ムカジー、S・P・ムカジー父子

訳注『ラダビン・ド・バル博士（一八八六～一九六七）略伝』

と近い関係にあったことも考慮すべきであらう。

インドの大学では学長 (Chancellor) は名誉職で、大統領や州知事が兼務する。パルの在職当時のカルカッタ大学学長は、ベンガル知事のケーシー (R.G. Casey) であった。ケーシーはオーストラリアの保守政治家で、日本軍のビルマ侵攻と大飢饉 (一九四三年) で危機に陥ったベンガル州の行政を立て直すために、チャーチルが送り込んだ人である [Casey 1962, 177] [Casey 1947, 91]。

ケーシーは日記の中でパルに触れ、パルが提出した学位授与式スピーチの原稿の中に「高度に政治的な言及」があるので、それを指摘し、このままでは授与式で同席できないから修正するよう求めたところ、パルが同意したと書いている (『July 1945, Personal Diary of R.G. Casey, Boxes 24-26, MS6150, Manuscript Collection, National Library of Australia, Canberra: Photo Eur 48, India Office Records, The British Library, London』)。プロシャント氏によれば、これは「学位授与式事件」という出来事を指している。パルが修了者へのスピーチで、インドの自由のためにつくす義務について語ったところ、ケーシーが激怒し、知事としてのプロトコルも守らずに退席してしまったという。おそらくパルの修正が不十分で、それがケーシーの怒りをつたのであらう。プロシャント氏はこの出来事に関連して、パルは自らクイット・インドイア運動 (一九四二年) に参加したわけでないが、官憲の厳しい弾圧に対して「人道的な感情」 (humane feelings) を抱いており、青年を弾圧から守りたいと思っていたと述べた。

同じ日のケーシーの日記によれば、パルは機密事項として、大学で S・P・ムカジー (Shyama Prasad Mookerji, 1901-1953) の一派が好ましからぬ影響力を振るっているとして述べ、それは短期間では根絶できず、対処するべく最善を尽くしているが、愉快な仕事ではないと語ったとされている。この点についてプロシャント氏は、それは話が逆であると語った。S・P・ムカジー派対策はケーシーが主導して行ったことであり、パルはケーシーが極秘に設置した調査委員会の委員長として、秘密報告書を提出したにすぎないということのようである。確かに、プロシャント氏の言うような経緯が背後にあったとすれば、パルの煮

え切らない態度が理解しやすいように思われる。

ここで問題にされている S・P・ムカジーは、わずか三三歳で副学長となり、一九三四年から三八年まで二期四年つとめ、退任後も大学行政に隠然たる力を保っていた。同時に、ムカジーは、右翼政党であるヒンドゥー大協会 (Hindu Mahasabha) のベンガルにおける指導者でもあり、五一年には右派の政党のインド人民連盟 (Bharatiya Jana Sangh) を創設し総裁となった。S・P・ムカジーの父は、アシュトシユ・ムカジー (Ashutosh Mukherji. 1864-1924) である。アシュトシユは有名な法律家で、カルカッタ高等裁判所判事を務めた後、〇四年から一四年までカルカッタ大学副学長として敏腕を振るい、カルカッタ大学発展の基礎を据えた。パルがアシュトシユの勧めでカルカッタ高裁の弁護士となったことは既に述べた(注三七)。

パルの前任者は B・C・ロイ (Bhban Chandra Roy. 1882-1962) であった。ロイは有名な医師で、スワラージ党から会議派に入って、ベンガル州会議派の有力政治家となり、一九四八年から六二年まで西ベンガル州首相をつとめた。スワラージ党は、ガンディーの指導する非協力運動が崩壊した後、非協力の方針を転換して、植民地支配機構の中に入って運動を継続しようとした保守的なグループが、二三年に結成した政党である。ケーシー日記によれば、ロイは S・P・ムカジーの親類で、政治その他何事につけ、ムカジーと非常に親密に動いていると言われていたとこう (17 Feb 1944)。

ケーシーは日記に、ロイから、カルカッタ大学の理科系の学科を一つのキャンパスに統合する案など、大学の拡張計画について働きかけを受けたと書いている (15 Nov. 1945)。このときの副学長はパルであるから、大学の運営に関して、パルとロイは——そしておそらく S・P・ムカジーも——協力して動いていたことになる。

48 「引退」と訳したベンガル語は "abasa" である。プロシャント氏によれば、パルは一九四六年三月で、副学長を退任するとともに、裁判所も辞めて、村に引きこもってしまったという。

プロシャント氏によれば、所得税法の弁護士として成功したパルは、三〇年代に、出身村のシャリムプルから一六〇一七マール離れたところにある、カンキラドホ (Kankiadhaha) に土地を購入し、大きな家を建てた。土地は七〇エーカーもあり、敷

一九四六年四月。それはパル博士の生涯の記憶されるべき年であった。第二次世界大戦で敗れた日本の指導者の裁判という任務を果たすために、さまざまな国とともにインドからも判事を日本へ送るように招請が来た。この名誉を得たのはラダビノド・パル博士であった。^⑧言うまでもなく、この裁判の主宰者は戦争に勝ったアメリカであった。裁判の初めにパル博士は、宣誓をするように言われたが、その宣誓は「極東」軍事裁判所のために特別に作成されたもので、一般的な裁判官の宣誓とはまったく異なっていた。博士は、裁判所の審理を完全に機密にすることを、全ての

地内に大きな池があった。パルはカンキラドホに滞在することを好み、普通の農民と分け隔てなく交際した。パルが引きこもったのは、このカンキラドホであった。シャリムプルにあった父の土地に関しては、パルは権利を主張せず、伯父の一人ロッキナラヨン・パルに贈与した。

カンキラドホは分離独立のとき、東パキスタンに編入された。このときパルは、不動産の「交換」を申請することができた。

「交換」というのは、インドからパキスタンに移住したムスリムがインドに残した不動産と、パキスタンからインドに移住したヒンドゥーがパキスタンに残した不動産を、等価交換する制度のことである。しかしパルは、カンキラドホの家には母の思い出が宿っていると言って、「交換」を拒んだという。どういう経緯があったのか分からないが、パルは何らかのかたちでカンキラドホと連絡を保ち、土地と家は維持されたようである。パルの死後、七一年にバン格拉デシュが独立すると、パルの四人の息子はカンキラドホに赴き、一週間滞在してムスリムの住民から歓待を受けた。プロシャント氏は、今から二年前にもカンキラドホを訪れた。このときパルの家には、二人のヒンドゥーが管理人として住んでいた。ところがその後、パル家が親しくしていたムスリムの隣人アイヌッディン・マリタが、何者かによって絞殺される事件が起こった。危険を感じた管理人の一人はインドに逃れたが、もう一人は殺された。家は破壊され、今は何も残っていないという。

バルがカルカッタに自分の家を持ったのは、東京裁判後のことである。ビモル氏によれば、バルは借金をして、ニューアリアルという住宅地に大きな家を建てた。この家には広い客間があり、レーリンクや日本人が訪れたのはこの家であつたろうという。ところが資金源について税務調査を受け、それを心外に思ったバルは、この家を売却し、タリガンジに移り住んだ。

ビモル氏によれば、バルはインド・パキスタン分離独立（一九四七年八月）に反対で、宗教等の理由で人々が対立し反目するのは良くないと考えていたという。

東京裁判が行われた時期は、ベンガルが分離独立のために東西に分割され、大混乱にあつたときにちょうど重なる。裁判におけるバルの仕事ぶりや「意見書」の内容を評価するとき、この点を見落としてはならないであろう。バルの出廷日数が少ないのは、妻の看病のためばかりでなく、未曾有の混乱から家族と財産を守るためでもあつたであろう。「意見書」に見られる厳しい帝国主義批判は、分離独立つまりイギリスの分割支配の結果の被害者としての立場からなされたものでもあつたであろう。

49 実、インド代表判事の選任は難航した。当時まだインドを支配していた植民地政府が最初に打診したのは、ボンベイ高等裁判所のワディア元判事であつた。しかしワディアに健康上の理由で辞退され、二人目の候補のアラーハバード高等裁判所のヴァルマー元判事にも断られ、おそらく三人目のバルでようやく決着したのである（File No.27-W/46, 1946, War Br. External Affairs Department (Ministry of External Affairs), Government of India (GI と省略）[National Archives of India, New Delhi (NAI と省略)」（NHKS スペシャル「パール判事は何を問いかけたのか」二〇〇七年八月十四日放送）。プロシャント氏の推測では、バルを推薦したのは、当時カルカッタ高裁長官であつたダービーシア（Sir Harold Derbyshire）であろうという。

プロシャント氏によれば、バルに判事就任の意向を打診する電報は、カルカッタのウィリアム要塞（Fort William）から来た。この要塞はカルカッタの中心部にあり、日本軍がビルマ国境に迫るまで、東部方面軍（Eastern Command）の司令部が置かれ、その後も軍関係の重要な施設が置かれていた。要塞から電報が来たのは、判事の選考が戦争省を中心に進められていたためであろう。このときバルは、前述のように、カンキラドホに引きこもっていたので、秘書のシンハ氏は電報を届けるのにならな

ん苦労したということである。

バルは一九四六年四月二七日に、東京裁判のインド代表判事に任命された。

日本では田中氏が「パール博士の判事就任は、親友であるネール首相の懇請と期待に応えたものである」とし「田中二〇〇一、二二九」、中島氏が「インド中間政府から」バルに「東京裁判へ判事として出廷してほしいという依頼があった」としているが「中島二〇〇七、五〇」、どちらも誤りであることは、右に示した任命の経緯から明らかであろう。インド中間政府が成立したのは四六年八月から十月にかけて、インドが独立したのは四七年八月のことである。四六年四月の時点では、イギリスがインドに派遣した内閣使節団が、国民会議派とムスリム連盟の代表と独立交渉を行っている最中であつた。バルは、イギリスの植民地政府によつて指名された判事だったのである。

日暮氏は、四五年の段階からインドが連合国内で外交交渉を展開して、東京裁判にインド代表判事を加えるように要求したとしている「日暮二〇〇二、二二九―二三二」。確かに四二年以降、インドは植民地であるにもかかわらず、自治領に準じる扱いを受けるようになり、例えばブレトンウッズ会議にはインド代表団が参加していた。しかしこのインド代表団は、インド総督に任命され、団長はイギリス人であつたことを見落としてはならないであろう。

東京裁判のインド代表判事をめぐる問題で、アメリカ政府と直接交渉したのは、バジパイ (Sir Girja Shankar Bajpai) である「日暮二〇〇二、二二九―二二」。バジパイはインド人であるが、第二次大戦中に印米関係が緊密になったのに鑑み、インド総督がインド代表としてワシントンに派遣したインド文官職 (ICS) のエリート官僚であつた。バジパイは Agent General (= 自治領代表) の肩書を持ち、極東委員会のメンバーでもあつた。しかし、そのオフィスは在米イギリス大使館内に置かれ、バジパイはインド総督だけでなく駐米イギリス大使 (当時はハリファックス Lord Halifax) の指揮も受けていた。バジパイがインドの独立を見通して、インドの将来の利益を考えたことはありえないことではない。しかしバジパイが、イギリス政府の指揮監督から離れて、近い将来に独立すべきインドの国益を独自に追求できる立場にあつたとは考えるのは、行き過ぎであろう。

インド政府のファイルによれば、四五年十一月十七日付でインド担当国務大臣がインド総督に電報を送り、アメリカ案ではインドが東京裁判から除外されていることを伝え、インドの代表が東京裁判に加えられるよう、緊急に対応策をつくることを指示したのが事の発端であった。このとき既に、インドが裁判に参加する根拠として、「極東の作戦でインド軍が果たした役割」と「インド人捕虜に対して犯された周知の犯罪」が挙げられ、アメリカとの交渉のルートとして、イギリス本国政府によるものと、極東委員会の代表であるバジバイを通じるものとの二つが検討されていた（Secretary of State for India to Governor-General, Defence Dept., No.25464, 17 Nov. 1945; and Minute by D.I.R. Muir, Jr. Secy., Defence Dept., 21 Nov. 1945, File No.27-W/46, War Br. External Affairs Dept. (Ministry of External Affairs), CI, NAI）。言へどもないことであるが、当時のインド総督はイギリスの軍人ウエーヴェル元帥であった。他方、ネルーを初めとする国民会議派の指導者たちは、四五年六月に釈放されたばかりであり、同年十一月にインド国民軍裁判反対運動が盛り上がるまで、ほとんど何もできないような状況にあった。バジバイが表に立って、アメリカ国務省と交渉を始めたのは、四六年一月三日である。しかしその実情は、十一月十七日から一ヵ月半の間にインド担当国務大臣とインド総督の間で合意された政策を実現するために、自分に割り当てられた役割を果たすということ以上ではなかったと考えられる。東京裁判にインドを参加させることは、宗主国イギリスの政策であった。

イギリスとしては、独立後のインドの国益を先取りして実現しておけば、今後のインドとの交渉がやりやすくなるとの計算があったものと思われる。また重要な背景として、インド国民軍裁判に対する批判が高まっていたことを考慮すべきであろう。イギリスは、日本と協力したインド国民軍の将校を、見せしめとして裁判にかけたが（四五年十一月五日開廷）、強力な反対運動が盛り上がり、却って窮地に追い込まれていた。それを切り返すために、東京裁判への参加問題を利用して、連合国側に立つて戦ったインド軍の功績を強調し、インド国民軍に参加せずに日本の捕虜となった将兵の苦勞を忘れていないことを示そうとしたのであろう。そのために選任されたバルが、もしチャンドラ・ボースとインド国民軍に近い人物であったとすれば（注二九参照）、皮肉と言っほかない。

裁判官が約束しなければならない点に、特に反対した。パル博士は、このような宣誓はできないとし、そのことを遺憾に思うがしかし、もし何らかの圧力をかけて宣誓をさせる試みがなされるならば、直ちに帰国せざるをえないと通知した。インドの判事のこのような強い態度を知り、他の判事たちは最後には、パル博士に一般的な宣誓をさせて、判事に就任させざるをえなかった。⁽⁵⁾このあとに起こったのは、さらに驚くべきことであった。世界の全ての国の判事たちの判決は、日本を非とし、日本を戦争犯罪で有罪と認めていた。まさにそのときに、世界の人々は、これは裁判ではなく裁判の戯画であって、日本は完全に無罪であるとするインドの判事の判決を聞いて驚き、惹きつけられ、言葉⁽⁶⁾を失った。八〇〇ページにも及ぶ長文の判決が世に現れると、インド人判事の断固たる独立精神を知って大きな反

50 これは、東京裁判の判事団が、少数意見が出てもそれを公表しないことに合意していたのに対し、あとから判事団に加わったパルが辞任を示唆しながら反対し、合意を崩壊させた出来事を指していると思われる【日暮二〇〇二、四〇七】【日暮二〇〇八、二二六】。

日暮氏が明らかにしたように、パルはもう一度判事を辞任する意向を示している。一九四六年十月、もともと半年の任期で任命されたことを主な理由として、ウェップ裁判長に帰国の希望を提出したのである【日暮二〇〇二、四〇七】。パルの任期に関してインド国立公文書館の文書は、「インド政府はカルカッタ高等裁判所の前判事 R・B・パル氏を、日本の主要な戦争犯罪人の裁判のために東京に設立された連合国戦争犯罪裁判所の判事として、月四〇〇〇ルピーの報酬で六ヵ月を越えない期間任命した。それはカルカッタ出発の日付をもって発効する」としているから、パルは当然の希望を出したと言えよう (A.D. Dundas, Secretary, War Dept. to Accountant General, No.17(34)-W.10/46, 27 Apr. 1946, File 306-F.E.A./46, 1946, Far East Asia Br., External Affairs Dept. (Ministry of External Affairs), GI [NAI])。狼狽したブックカーサーはパルを思ふとどうやらせむじむ工作し

自分の特別機を提供することまでして、インドにいたバルを日本に連れ戻そうとした。このときバルは報酬の引き上げも要求しているが、注目されるのは、やり取りのなかで、インド政府に決断を促しつつ、次のように述べていることである。「バルの任期延長の」決定をするに当り「インド」政府は、裁判所の管轄権に関する弁護側の異議が既に聞かれ、それに関して私が、裁判所の他の判事に反対する覚書を既に提出していることを知るべきである。私は他の判事と意見を異にしており、弁護側の異議を実質的に支持するよう提議した」(Dr. Pal to Governor-General, Defence Dept., Telegram A3148, 19 Nov. 1946, in *ibid.*)。ここでバルが弁護側の異議(反対動議)と言っているのは、清瀬弁護人が五月十三日の陳述で、裁判所には平和に対する罪と人道に対する罪を裁く権限がない、と主張したことを指していると理解してよいであろう「朝日新聞東京裁判記者団一九九五、上、八〇〜八一」。フランス代表判事ベルナルが残した文書の調査をした高木氏は、バルが開廷してからわずか二ヵ月後に、「平和に対する罪」が従来の国際法に合致せず不当であるという主旨の覚書を書き、他の判事たちと論争を始めたことを明らかにした「高木二〇〇八、三八二〜三八四」(この点については「パール・田中二〇〇八、三〇四」も参照)。バルの電報に「覚書」とあるのは、これを指しているであろう。

プロシヤント氏によれば、バルはレーリリンクなど二、三人を除き、東京裁判の判事とはあまり親しくならなかった。右のような事情を考えれば、やむを得ないことであつたろう。バルはこれらの少数の同僚と一緒に外出し、PX(米軍の売店)で買物をしたり、宝くじを買ったりするのを楽しんだそうである。それ以外はあまり外出せず、東京の印象についても、宿舎の帝国ホテルから遠くまで見渡せたことくらいしか、家族に語らなかったようである。

51 バルの遺族が「意見書」の趣旨をこのようにまとめているのは、きわめて興味深い。田中氏の「日本無罪論」は、ためにする歪曲とは必ずしも言えないということであろう「田中二〇〇一」。

注四九で明らかにしたように、バルは植民地政府によって指命された判事であつた。しかしバルは、インドが独立したあとにも新政府と接触せず、インド政府とまったく相談せずに意見書を提出した「内藤二〇〇二、一二八」「中里二〇〇八、六九」。

響があった。⁽⁵²⁾ 栄光の頂点に登り詰め、名声の花輪を首にかけて、一九四八年十一月、博士は帰国した。しかしそれから間もなく、一九四九年四月、博士は愛妻の故ノリニバラを失った。博士は喜びの極みにあったときに、深い心の痛みを負ったのであった。

この出来事の後、博士の名前は国の内外に広まった。一九五二年八月、博士は国際連合の国際法委員会の委員に選出された。⁽⁵³⁾ 一九五七年、博士はハーグにある常設仲裁裁判所の判事に就任した。一九五八年、博士は国際法委員会の委員長に選出された。一九五九年、インド政府はバル博士に蓮花大綬章 (Padma Vibhushan) ⁽⁵⁴⁾ を贈って顕彰した。同年、

プロシヤント氏に、インド政府のファイルが、「バル判事はインド政府の代表として裁判に加わっているのではない。彼はインド政府からいかなる指示も受けていないし、インド政府の助言を求めたことも全くなし」 (Minute by K.P. Menon, 20 July 1948, File No.489-CJK/49, 1949, China, Japan and Korea Br. Ministry of External Affairs, GI [NAI]) ⁽⁵⁵⁾ としていることを指摘し、何故インド政府と相談しなかったのか、その理由を訊ねると、プロシヤント氏は厳しい表情になって、何故そうしなければならないのかと反問し、バルは独立心が強く血氣盛んな (spirited) 性格だったと語り、バルは理性と法だけを頼りに意見書を書いたと述べた。

続けて、インド政府からバルに意見書を変えるよう圧力がかったとする説があることについて訊ねたところ「朝日新聞取材班二〇〇六、九六」⁽⁵⁶⁾、プロシヤント氏は、さまざまながあったが自分は話す立場にない、インド国立公文書館のファイルを見るのがよからう、政府は関連ファイルを破棄してしまっているであろうが、とだけ語った。⁽⁵⁷⁾

⁵² バル意見書は法廷で読み上げられることはなかったが、公表された。その後バルは一九五三年に、意見書をカルカッタで出版した [Pal 1953]。約七〇〇ページの大冊である。「八〇〇ページ」というのは、これを指しているであろう。なお、意見

書のタイプコピーは、パルの死後、散逸するのをおそれたビモル氏が、フェデレーションホール協会に移し、今でも協会に保存されている。(補正)

53 International Law Commission. プロシャント氏によれば、このとき、インド代表のベネガル・ラーオ (Benegal Narasinga Rau) が任期を残して辞任したため、欠員が生じた。インド政府は二、三人の法律家を推薦したが、国連の同意を得られず、パルを推薦したところ、承認された。したがってパルは、ラーオの任期が終わるまで委員を務めるかたちで、委員の仕事を開始することになる。ラーオはインド文官職官僚で、カルカッタ高裁でパルの同僚だったことがある。著名な議会議法の専門家で、インド憲法の起草にも関った人である。兄弟のベネガル・ラーマ・ラーオ (Benegal Rama Rau) はインド文官職官僚で、駐日インド政府代表 (一九四七～四八。大使に相当)、駐米インド大使、インド準備銀行総裁等を歴任した。

国際法委員会においては、パルは、一九五四年、人類の平和と安全に対する罪に関する法案に反対して、次のように述べた。「私が法案に反対するのは、法案で扱われているさまざまな行為が、不法でもなく非難すべきでもないからというわけではなく、国際社会の現在の構造が、この点に関して、正義を実現する余地がないようにできているからである。現在の国際機関は、「法案で」試みられている方向を効果的に育てていくような方策をとる能力を絶望的に欠いている。

提案された条文の大部分は、国際社会の組織の現段階においては、実際の犯罪者の踵を傷つけることにすら成功せず、他方では、他ならぬ実際の目的の頭を傷つけてしまうかもしれない。我々は世界史の危機の時代に立っている。我々は注意深く動くべきである。」[Obituary 1967, 33]

パルはプロシャント氏を現地雇用職員としてジュネーブに同行させた。ジュネーブでパルは、国際法の専門家として心から尊敬されていたという。

54 インドの勲章の一つ。一九五四年制定。最高の勲章である「インド宝冠章」(Bharat-Ratna)の次に位置する。パルの時代には、一年に二、三人受章するのが通例であった。受賞者が増えた現在でも、受章するのは十人内外にすぎない。

訳注『ラダビノド・パル博士 (一八八六～一九六七) 略伝』

博士はインド国民栄誉法学教授 (National Professor of Jurisprudence) に就任した。博士はこうして、二輪の花を同時に名声の花輪に加えたのであった。⁽¹⁵⁾

一九六二年、博士は再度国際法委員会の委員長に選ばれた。これは稀にみる栄誉であり、今日にいたるまでそれを受けたのは、博士ただ一人である。一九六六年、博士は最後の名誉を愛する日本から受けた。パル博士は老境にあったが、沈む太陽が六時頃西の空を染めるように、再び天才の光芒を放って赤い輝きで東方の空を満たすかのようであった。日本の日本大学は博士に名誉法学博士号を贈り、日本の天皇は博士に勲一等瑞宝章を与えた。

東京都知事と京都市長は、博士に東京都・京都市自由章 (Freedom of the City of Tokyo and Kyoto) を与えて讃

55 国内での活動については『略伝』には言及が少ないが、インタビューからは、三点——ネルー首相と選挙立候補問題、土地改革反対運動、フェデレーションホール協会会長としての活動——が重要であったことがうかがわれる。

第一。ネルーとの関係には複雑なものがあつたようである。例えば、国際法委員会の仕事でジュネーブに滞在していたときに聴いていたときに、プロシヤント氏は、アメリカの委員に「ネルーは共産主義者か」と訊かれて困惑し、「それは共産主義の定義による」と質問をかわしたエピソードを紹介した。そこでネルーとの関係について訊ねると、プロシヤント氏はそれには直接答えず、次のように語った。

一九五三年、S・P・ムカジーが死去した。S・P・ムカジーは、一九五二年の独立インド最初の総選挙に際して、右派の政党、インド人民連盟を結成して、カルカッタ南部の選挙区から出馬し、当選して下院議員となっていた。補欠選挙が行われたが、そのときパルは、インド国民会議派から立候補して落選した。プロシヤント氏によれば、このときネルーがパルに会議派から立候補するよう働きかけ、パルは迷った末、選挙運動に金を一銭も使わず、投票依頼も一切しないことを条件に、受諾

したのだという。この出来事についてプロシヤント氏は、バルが別の政党から立候補する可能性があったので、ネルーは会議派から立候補させて意図的に落選させ、バルの政界進出の夢を砕いたのだと述べた。別の政党とは何なのか、プロシヤント氏は語らなかったが、これがバルの政界進出の最初で最後の試みだったと強調した。（編注）⁴

なお、ビモル氏によれば、バルはネルーを、追従者を周囲に集めるという理由で嫌っていたという。このネルー批判の仕方は、S・P・ムカジーのものに似る。しかし同時にビモル氏は、バルは会議派の党員ではなかったものの、胸の内では会議派支持者だったと思うと語った。

第二。インドの独立後、土地改革が推進され、ベンガルではザミンダーリー制という十八世紀末から続く土地制度が廃止された（一九五三～五五年）。プロシヤント氏によれば、このときバルはザミンダール（大地主）側の弁護士として、ザミンダーリー制廃止に反対して闘ったという。

第三。ビモル氏によれば、バルは一九六〇年から六七年までフェデレーションホール協会（Federation Hall Society）の会長を務めた。この協会の起源は〇五年のベンガル分割反対運動にまで溯ることができるとされるが、実際に活動するようになったのは五〇年代以降のことのようである。協会の目的は、ベンガル語を話す人々の統一と全インド人の統一を促進すること、インドと外国との間に友好関係を樹立すること、人文・社会科学の研究を推進するセンターとなること、及び、スワデシ運動の偉大な指導者たちを顕彰することである。プロシヤント氏はフェデレーション協会の終身会員とのことである。

フェデレーション協会会長のバルの前任者は、P・N・バナジー（Pranatha Nath Banerjee, 1879-1960）であった。バナジーはロンドン大学で経済学博士号を取ると同時に、法廷弁護士資格も取り、カルカッタ大学のミントー経済学教授として長く教鞭を取った。フェデレーションホール協会が現在のかたちになったのは、バナジーの手腕によるところが大きいようである。バナジーは、一九二三年、インド国民会議派からベンガル立法議会の議員に当選したが、会議派右派のマダン・モーハン・マラーヴィーヤ（Madan Mohan Malaviya, 1861-1946）が、コミュナル裁定（Communal Award）議員のなかの宗教集団別の比率、特

訳注『ラダビノド・バル博士（一八八六～一九六七）略伝』

えた。⁽³⁶⁾

数えきれぬ日本人の胸の内のもっとも秘められたところから、敬愛の念が泉のように湧き出た。日出ずる国日本は、この輝くばかりに高邁な人物を敬意をもって遇した。⁽³⁷⁾

人生において得られる満足の最も大きなものは、自己を余すところなく実現することである。ラダビノド・パル博士はこの満足を完全に味わった。博士は胡麻粒を一つ一つ集めるようにして自己を形成し、一瞬一瞬ごとに自己を打ち立てなければならなかった。博士はそうした歩みの一つ一つに人生を感じていた。⁽³⁸⁾

にヒンドゥーとムスリムの比率に関する協定で、ムスリムに有利だとの見方があった）に反対して、ナシヨナリスト党（Nationalist Party）を結成すると、マラーヴィーヤの熱烈な支持者となり、晩年はヒンドゥー・ナシヨナリズムに傾斜した『Sen 1972, Vol.1, 121』。マラーヴィーヤは会議派右派の重鎮であったが、同時に、ヒンドゥー大協会の創立者の一人でもあった。また、パナジーは、アシウトシュ・ムカジーの女婿、つまりS・P・ムカジーの義兄であった〔Sengupta 1976, 302〕。

パル人脈には、カルカッタ大学でも（注四七参照）、フェデレーションホール協会でも、S・P・ムカジーとヒンドゥー大協会の影が見え隠れしている。パルが少なくともヒンドゥー大協会の周辺にいた人であることは確かであろう。従来指摘されてきたように、パル意見書には強い反共主義とネルー批判が見られる。パルのインド社会における位置がこのようなものであったとすれば、それも驚くには当たらないであろう。

また、パルは北カルカッタのサラスワティー学校の運営に関る一方、法律用語のベンガル語訳を検討する委員会の委員としても活動した。さらに、全インド言語会議（All India Language Conference）の議長に選ばれたこともあった。全インド言語会議は、ヒンディー語の国語化を強行する動きに反対するために作られた組織である〔Sinha, 1958?〕。

56 「自由章」がいかなるものであるかは不明。バルには東京都から「東京都の鍵」が、京都市から「京都市の鍵」が贈られている。「パール博士歓迎会一九六六、四四、四九、七〇」。

57 バルは東京裁判のあと三度来日した。バルの訪日に関しては「パール・田中二〇〇八」、「パール博士歓迎会事務局一九六六」、「中島二〇〇七、五・六章」、「朝日新聞取材班二〇〇六、一〇六〜八」などがある。

プロシヤント氏によれば、一九六六年のバル招聘の中心となった岸信介は、バルを非常に鄭重にもてなした。バルが体調を崩して入院すると、岸は同行のプロシヤント氏に電話番号を渡し、いつでも連絡するように言っただけでなく、通訳を伴いバラの花輪をもって病床のバルを見舞い、一時間ほど懇談したという。

プロシヤント氏に田中正明氏について訊くと、彼はほんの少しだけ英語を話した、と微笑していた。

58 プロシヤント氏によれば、バルは、一九六六年十二月十六日、腸の病気でベンガル州総合病院 (Presidency General Hospital, 通称 P・G・ホスピタル) に入院した。翌年の一月四日午前九時半、脳出血を起こして昏睡状態に陥り、一月十日午後三時三五分、永眠した。ビモル氏によれば、バルの遺体はいったんタリガンジの自宅にもどり、そこから葬列は、カルカッタ大学、ベトゥーン・カレッジ (Bethune College)、サラスワティー学校、フェデレーションホール協会を経て、ケヤトラの火葬場に向かった。

バルの友人について訊ねると、プロシヤント氏は、バルの交際範囲は「コスモポリタン」だったと断った上で、バルの親しい友人として、S・P・ムカジー、B・C・ロイ、チャル・チョンドロ・ビッシャス、ルベン・ミットロ、ビジョン・ムカジーの名前をこの順に挙げた。フォズルル・ホク (A.K. Fazlul Huq, 1873-1962) との間柄について訊くと、もちろん親しく、ホクはバルを可愛がつてくれたという答えであった。

S・P・ムカジーとB・C・ロイについては注四七を参照していただきたい。二人とも保守政治家で、カルカッタ大学副学長経験者である。ビッシャスはカルカッタ高裁判事からカルカッタ大学副学長、ミットロはカルカッタ高裁判事、ムカジーは

カルカッタ高裁を経てインド最高裁判所の判事になった人である。フォズルル・ホクは全インドムスリム連盟及び農民大衆党 (Krishak Praja Party、東ベンガルのムスリム上層農民を支持基盤とする政党) で活動した大衆政治家で、一九三七年から四一年まで第一次内閣、四一年から四三年までS・P・ムカジーのヒンドゥー大協会と連立で第二次内閣を組織した。

バルはガンディー主義者だったか、との問いに対して、プロシヤント氏もビモル氏も言下に否定した。プロシヤント氏によれば、バルが尊敬していたのは、ロビンドロナト・タゴールであったという。タゴールは国際主義者としての側面をもち、ガンディーのナシヨナリズムを批判したことがある。両者の論争は、インド・ナシヨナリズムの歴史において重要な意義をもっている。

一般的に言つて、ベンガルの法曹エリートは西欧化された特権的で保守的な社会層であり、裸体で農民大衆の間を回つて民族運動を指導するガンディーに違和感をもつていたとされる。彼らの間からガンディー主義者が現われたとしたら、それはかなり特別なことと見なさなければならない。また、イギリス人支配者にとって、ガンディーは恐るべき危険人物であり、公然たるガンディー主義者が、植民地支配体制の秩序維持に責任をもつカルカッタ高裁の判事に登用されることなど、まったく考えられないことであった。もしそういうことが起こったとしたら、登用した責任者の大失態と見なされたことであろう。ベンガルの法曹エリートとナシヨナリズムの関係を考えるときに問題にされるのは、ガンディー主義ではなく、右翼のヒンドゥー大協会との関係である。彼らの間には、S・P・ムカジーばかりでなく、かなりの数のヒンドゥー大協会支持者がいた。

ガンディーが「行動か死か」というスローガンを掲げて呼びかけた「クイット・インドシア運動」(一九四二年八月)に、バルが参加しなかったことは注四七で触れた。

補注

1 バルのプレジデンシー・カレッジの級友で後に著名になった人物に、チャル・チョンドロ・ビッシャシュ (Charu Chandra

Biswas) とサラト・チャンドラ・ボース (Sarat Chandra Bose) がいた。前者はカルカッタ高裁判事、インド政府外務大臣等を歴任した。後者はスバス・チャンドラ・ボースの実兄で、カルカッタで最も有名な弁護士の一人となり、同時に、弟のスバス・チャンドラと共に政治活動を行った。(Shital Chandra Pal, Padmabibhushane Bibhushita Shri Radhabrinod (Kalkata, n.d.), pp.36-37.)

2 プロシヤント氏によれば、一九四八年初め、バルが妻の看病のために帰国していたときに、ネルーから接触があった。ネルーは、インドの国際的な立場が悪くなることを理由に挙げて、多数派の判事の意見に従うようにバルを説得しようとした。バルが断ると、ネルーは、インド政府はバルの航空賃を負担しないと断ったという(二〇〇九年三月四日談)。

3 プロシヤント氏によれば、バルは「意見書」のタイプコピーを数部カルカッタに持ち帰った。そのうち一部は、求めに応じて、出版社に渡し、これが出版の原稿となった。もう一部は、サラト・チャンドラ・ボースに渡した。ボースは「The Nation」という自分の日刊紙に連載欄を設け、「意見書」の内容を紹介した。いずれの場合においてもバルは原稿料は一切取らなかったという。また、日本の東京裁判弁護団が一九五一年五月十九日付で手紙をバルに送り、「意見書」を和訳し、『平和のバイブル』というタイトルで出版したいと言ってきたことがあった。バルは、著作権料を原爆の犠牲者の救援に使うという条件で、承諾した。

(以上、二〇〇九年三月四日談)

4 補欠選挙の投票は一九五三年十一月二十二日に行われた。開票結果は、S・グプト(インド共産党) 五八、二二一票、ラダビノド・バル(会議派) 三六、三二九票、J・P・ミットロ(人民連盟) 五、四三一票、B・ボース(前衛ブロック) 五、四一五票であった (Dilip Banerjee, Election Recorder: An Analytical Reference, revised ed. (Kolkata: Star Publishing House, 2005), p.91)。

三 資料 「弔辞」

——元カルカッタ高等裁判所長官 P・B・チョクロボルティ (P.B. Chakravarti) (一九六七年一月十一日、全インドラジオ・カルカッタ放送局より放送)——

インド国民榮譽法学教授ラダビノド・パル博士はもうおられません。博士は昨日逝去されました。今放送を聴いておられる皆様は、博士のお名前をあまりご存知でないかもしれません。お名前をよく知っている方もいくらかおられます。博士のお名前が何を意味するのか、正確にはご存知でないかもしれません。端的に申しましょう。博士のお名前は、これまでに国際的な名声をかちえた、ただ一人のインド人法律専門家を意味するのだと。パル博士は成功した弁護士でした。しかし他にも成功した弁護士はいましたし、職業的に博士よりもっと成功した者もいました。博士はカルカッタ高等裁判所の判事でした。しかしカルカッタでも他の都市でも、高等裁判所の判事は他にもいました。博士はカルカッタ大学の副学長でした。しかし他にも副学長を務めた者はいました。博士を無類の存在として他から区別している唯一の点は、インドの法律家のなかで博士だけが、法律の世界の高い領域に飛翔し、世界の主権国家の關係が變動するなかで、現在、国際公法の研究、適用及び発展に取り組む法律専門家と法学者の選ばれた一団の中に、名誉ある場をかちえたことにありました。過去三、四十年の間、その生涯のさまざまな時期に、博士はいくつかの国際的な法律・司法機関のメンバーでありました。そのうちの二つを特に申し上げておくべきかもしれません。博士は、日本の戦犯容疑者の裁判のために一九四六年から四八年まで東京で開廷した、極東国際軍事裁判所のメンバー

でした。そして亡くなる日まで博士は、国際連合の下部機関としてジュネーブで活動する、国際法委員会のメンバーでした。博士は五八年と六二年の二回、この委員会の委員長になりました。博士は、インドが当然誇るべき、世界的名声のある法律専門家でした。

この非凡な人物の生涯はどのようなものだったのでしょうか。私見によれば、博士の一代記は、刻苦勉励と不動の目的意識によって、困難を克服し成功の頂点に辿り着けることを示す例証として、若者向けの教科書に載せる価値のあるものです。実にたくさんの偉人について、彼らが微賤から身を起こして大成したと言うことができますが、パル博士ほど低いところから始めて、後に高名になった人はいりません。博士自身がきわめて率直に、幼少期の境遇と、味わわなければならなかった窮乏について語り、私自身を含めてたくさんの者が、その物語を博士自身の口から聞きました。博士は高いカーストの人ではありませんでしたし、あまり資産に恵まれない家の出でした。博士が幼少期に、生きるために奉公人の仕事さえ受け入れなければならなかったのは、そういう事情によります。しかし博士は決して逆境にめげず、逆境と絶え間なく戦いながら、学位を得るために勉学を続け、ついに数学修士号を獲得しました。それから博士は法学修士号を、その後博士号を得ました。この博士号は価値の疑わしい名誉博士号ではなく、学界に確固たる寄与をした学位論文の力によるものでした。博士はタゴール法学教授の職に就くことを三度要請されましたが、それはこの寄付講座の歴史のなかで前例のない名誉でありました。法曹界では、博士が一流の列に加わるのにさして時間はかかりませんでした。博士は初めの頃は所得税法を専門としました。博士は所得税の諸問題に関して、インド政府の法律顧問をおよそ十五年間務めました。一九四一年に博士が高裁判事に昇任したとき、私は後任者となりました。法律の学問的な研究においては、しかし、博士はヒンドゥー法の法理学的な考察に特に関心を示し、永続的な

価値のある業績を残しました。法曹界においても学界においても、博士は深い学殖と独創的な精神をもつ非凡な人物として抜きん出ていました。

しかし、国際的な分野における経歴と比較したとき、パル博士のインドにおける経歴は光を失います。博士の生涯においてもっとも顕著な出来事は、東京戦争犯罪裁判所のメンバーに選任されたことであり、博士の生涯においてもっとも顕著な行為は、当該裁判において反対意見書を書いたことでありました。反対意見書によって博士はただちに、国際公法に関するもっとも独創的な思想家の一人に加えられるようになりました。博士は、第二次世界大戦で連合国側にあつた、インド政府の代表として裁判所の裁判官を務めました。それにもかかわらず博士が、被告人はそれぞれみな、それぞれすべての起訴内容について無罪とであるとしたこととは、博士の司法上の独立性と知的な高潔さをよく示すものと言えましょう。無罪としたことは、それ自体としては、博士の意見書を偉大な意見の表明とするものではないかもしれません。しかし博士はまた提議も行い、爾来その提議は、少数意見としてではありますが、国際公法の体系に取り入れられ、今や、それを議論しないような国際公法の著作は完全ではないとされており、大雑把に申しまして、博士は、いかなる範疇の戦争も——侵略戦争でさえも——まだ国際公法上の犯罪にはなっていないとし、戦争終結時に敗戦国のメンバーを、戦争犯罪の廉で裁判にかける権限は、戦勝国にはまったくなくしました。博士は、もしそのような権限が容認されたとしたら、戦争の結果が逆であつた場合、つまり、実際は敗れた者が勝利した場合、検察官と被告人が入れ替わるのもっともだということになつてしまふだろうと指摘しました。それ以来、国際公法の著述家は、この理解に反論しようと苦勞してきましたが、「パル博士の」反対側に高い権威という力があるにもかかわらず、まだ誰も、理性と法を根拠にしてこの理解に十分に対抗するのに成功した者はおられません。

私生活においては、バル博士はもともと洗練された部類の人間で、ひけらかしなどまったくせず、絶対的に高潔で、誰に対しても等しく人当たりがよく、そうして、誇張して申しているものではありませんが、博士の周りにはいつも優美と明知の光が放たれておりました。博士の中に、本物のインドの学者と紳士の古風な魅力が生き残っているのが見られました。そのような人間が我々の間に存在したことは、誇るに足ることでもあります。今や博士は旅立たれました。しかし博士の個人的な記憶はながく残るでありましょうし、博士の業績はもつとながく残ることでしょう。そして実際、博士のような人物を再び見るまで、我々は非常に長い時間待たなければならぬでしょう。インドばかりでなく、全世界の弁護士と法律専門家が、博士の死を深くまた広く悼むことでありましょう。

文献リスト

- Casey, R.G. 1947. *An Australian in India*. London: Hollis & Carter.
- Casey, R.G. 1962. *Personal Experience 1939-46*. London: Constable & Co.
- Chakrabarty, Bidyut. 1990. *Subhas Chandra Bose and Middle Class Radicalism: A Study in Indian Nationalism, 1928-1940*. Delhi: Oxford University Press.
- 'Dr. Radha Binode Pal, appointment of as Vice-Chancellor' 1944. *The Calcutta Weekly Notes*, Vol.48, No.18 (20 March).
- 'Dr. Radhabinod Pal: reversion to the Bar' 1943. *The Calcutta Weekly Notes*, Vol.47, No.31 (28 June).

訳注『ラダビノド・バル博士（一八八六―一九六七）略伝』

- Garrett, J.H.E. 1910. *Bengal District Gazetteers: Naida*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- High Court at Calcutta 1962. *High Court at Calcutta: Centenary Souvenir, 1862-1962*. Calcutta: High Court Buildings.
- Nandy, Ashis 1995. 'The Other Within: The Strange Case of Radhabinod Pal's Judgment on Culpability'. In *The Savage Freud and Other Essays on Possible and Retrievable Selves*. Ashis Nandy. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 'Obituary: Radha Binode Pal 1967. *The Calcutta Weekly Notes*, Vol.71, No.10 (16 January).
- O'Malley, L.S.S. 1916. *Bengal District Gazetteers: Rajshahi*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- [Pal, R.B.] 1953. *International Military Tribunal for the Far East: Dissident Judgment of Justice R.B. Pal*. Calcutta: Sanyal & Co.
- Presidency College 1956. *Presidency College, Calcutta: Centenary Volume, 1955*. Alipore: West Bengal Government Press.
- Röling, B.V.A. and Antonio Cassese 1993. *The Tokyo Trial and Beyond: Reflections of a Peacemonger*. Cambridge: Polity Press.
- Sachse, F.A. 1917. *Bengal District Gazetteers: Mymensingh*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- Sen, S.P., ed. 1972. *Dictionary of National Biography*. 4 Vols. Calcutta: Institute of Historical Studies.
- Sengupta, Subodhchandra, ed. 1976. *Sansad Bāṅgālī Charitābhidhān*. Kolkata: Sāhitya Sansad. 1976.
- Sinha, K.K. ed. 1958? *Modern India rejects Hindi (All India Language Conference Report)*. Calcutta: Writers' House.
- Sinha, Nirmal, comp. 1968. *Freedom Movement in Bengal 1818-1904 Who's Who*. Calcutta: Government of West Ben-

gal.

University of Calcutta 1957. *Hundred Years of the University of Calcutta*. Calcutta: University of Calcutta.

朝日新聞取材班二〇〇六『戦争責任と追悼』〈歴史と向き合う〉朝日選書

朝日新聞東京裁判記者団一九九五『東京裁判 上下』朝日文庫

栗屋憲太郎一九九六「解説」B・V・A・レーリンク、A・カッセーゼ『レーリンク判事の東京裁判——歴史的

証言と展望——』(小菅信子訳)新曜社

家永三郎一九九八「十五年戦争とパール判決書」『評論一 十五年戦争』(家永三郎集第十二卷)岩波書店

一又正雄一九六六「パール博士の人となりと業績」東京裁判研究会著『共同研究 パール判決書——太平洋戦争

の考え方——』東京裁判刊行会

下中彌三郎二〇〇八「序」パール・田中編著『パール博士「平和の宣言」』小学館(一九五三年版の復刊)

高木徹二〇〇八「パール判事——知られざる出自——」『文藝春秋』一月号

田中英夫編一九九一『英米法辞典』東京大学出版会

田中正明二〇〇一『パール判事の日本無罪論』小学館文庫(一九六三年版の文庫化)

戸谷由麻二〇〇八『東京裁判——第二次大戦後の法と正義の追求——』みすず書房

内藤雅雄二〇〇二「M・K・ガンディーと日本人——日中戦争をめぐって——」『アジア・アフリカ言語文化

研究』六三

訳注『ラダビノド・パール博士(一八八六—一九六七)略伝』

中里成章二〇〇八 「書評 中島岳志著『パール判事——東京裁判批判と絶対平和主義——』」『アジア経済』四九
一八

中島岳志二〇〇七 『パール判事——東京裁判批判と絶対平和主義——』白水社

パール博士歓迎会事務局編一九六六 『アイ ラブ ジャパン——パール博士言行録』東京裁判刊行会

ラダビノード・パール著・田中正明編著二〇〇八 『パール博士「平和の宣言」』小学館（一九五三年版の復刊）

日暮吉延二〇〇二 『東京裁判の国際関係——国際政治における権力と規範——』木鐸社

日暮吉延二〇〇八 『東京裁判』講談社現代新書

レブラ、ジョイス・C 一九六八 『チャンドラ・ボースと日本』（堀江芳孝訳）原書房

レーリンク、B・V・A／A・カッセーゼ一九九六 『レーリンク判事の東京裁判——歴史的証言と展望——』（小

菅信子訳）新曜社